

# 7月の肥培管理について

■ 1回目穂肥は的確に、2回目は確実に ■

## 1. 水稻の生育ステージ

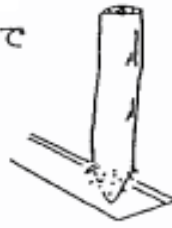
今年度福井県を含む北陸地方は、平年より3日早く6月9日に梅雨入りしました。平年、5月上旬に田植されたハナエチゼンは6月27日頃、5月下旬に田植されたコシヒカリは7月13日頃、あきさかりは7月18日頃、幼穂形成期（幼穂長2mm）を迎えます。

## 2. 穂肥のための幼穂長の調べ方 □ 幼穂長と生育を確認して適切な穂肥を □



①生育の平均的な株を採ず  
②草丈の最も高い茎1本を根をつけたまま取る！

③カッター等で根元の方から上方へていねいに切る！



④白い綿毛のようなものが幼穂！

ハナエチゼン2mmを確認  
コシヒカリ10mmを確認  
あきさかり 2mmを確認



幼穂長 10 mm

穂肥は適正な着粒数と登熟向上に向け、必ず幼穂長と圃場ごとの生育（草丈・葉色・莖数）を確認し適期に適量を施すことが極めて大切です。

施用時期が早いと、1つの穂につく粒数が増加しますが、稈が伸び、止葉が長く、倒伏しやすくなり、結果として登熟が悪くなります。逆に、遅いと、穂につく粒数に不足をきたし、精米中の蛋白含有量が高くなり、食味を低下させる原因となりますので、1回目の穂肥は時期を的確に施しましょう。

近年温暖化している気候の中、8月上旬中旬の出穂期に葉色が非常に淡くなっている（夏場の稲体の活力が低下している）ことも胴割れ米の発生要因と考えられるため、暑い夏場を乗り切るために2回目の穂肥は確実に実施しましょう

幼穂長	出穂前
0.2 mm	30日
2 mm	23日
10 mm	18日
50 mm	14日
100 mm	10日

## 3. 穂肥時期・量の目安 □ ほごえ彩ゆうき施用量 □

品 種	1回目		2回目	
	時 期	10 <sup>ア</sup> 施用量	時 期	10 <sup>ア</sup> 施用量
ハナエチゼン	幼穂長 2 mm (6月27日頃)	適正 15 kg	1回目の10日後 (7月7日頃)	適正 15 kg
		やや過剰 13 kg		やや過剰 13 kg
<u>コシヒカリ</u>	<u>幼穂長 10 mm</u> (7月18日頃)	適正 13~15 kg	<u>1回目の7日後</u> (7月25日頃)	適正 13~15 kg
		やや過剰 10 kg		やや過剰 10 kg
		過剰 -		過剰 10 kg
あきさかり	幼穂長 2 mm (7月18日頃)	適正 13~15 kg	1回目の10日後 (7月28日頃)	適正 13~15 kg
		やや過剰 10 kg		やや過剰 10 kg

4. 基肥一発肥料の対応 □ 間断通水で肥効の発現を □



原則、穂肥の必要はありませんが、中干し後は間断通水として、穂肥効果の発現を促しましょう。

一発肥料でも前年が転作などの理由で基肥を減らしている場合は、穂肥窒素量が不足するので、不足分に換算した穂肥を施すようにしてください。又、2回目の穂肥時期となっても葉色が淡いまま登熟不良を招くと予測される場合、ほごえ彩ゆうきを7kg/10アール程度、2回目の穂肥に相当する時期に追肥しましょう。

5. 倒伏防止 □ 今年の稲は倒さない □

コシヒカリの乳白米が多い理由として、登熟前半（8月上旬～中旬）頃にイネが倒伏し、品質が低下していることも上げられます。倒伏すれば、食味も悪くなるのだから、その危険性が高い場合は、倒伏軽減剤を必ず散布しましょう。

稲体が軟弱で葉が垂れ葉色が濃いなど稲の姿が悪い場合、倒伏する可能性は高くなります。

田植え・播種	出穂予測	倒伏軽減剤 散布時期	
		スマレクト粒剤 (出穂15日～10日前)	ビビフル粉剤 (出穂10日～5日前)
5月20日移植 5月上旬 直播	8月5日頃	7月20日～25日 【幼穂長50mm】	7月26日～31日 【幼穂長100mm】

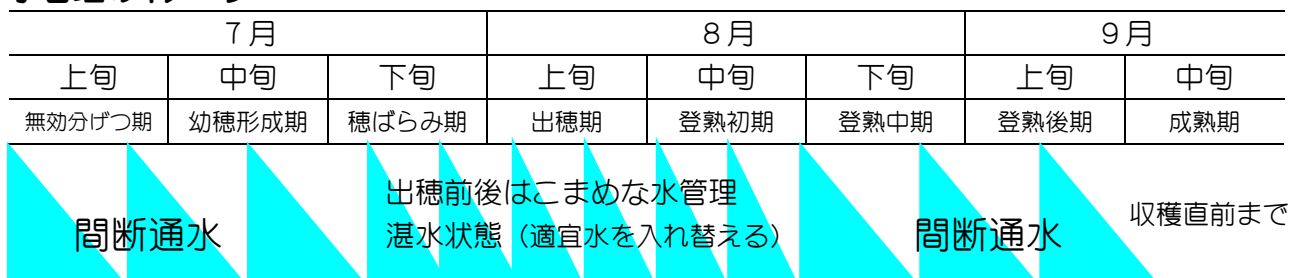


6. 間断通水 □ 夏場を乗り切る水管理 □

玄米の品質向上を図るためには、幼穂形成期から成熟期（収穫直前）まで土壌水分を維持することが重要です。

根の活性化のために、通水と通気を図って根へ酸素を供給するようにしましょう。

**水管理のイメージ**



7. 病害防除

イモチ病対策として、移植については苗箱施薬として嵐プリンス粒剤が使用されていますが、移植でも箱施薬していない場合や、直播でまだの場合はオリゼメート粒剤もしくはイモチエース粒剤を早急に散布しましょう。

また、昨年紋枯れ病の発生の多かった圃場では、リンバー粒剤を7月上旬から中旬に散布してください。（出穂30日前から出穂期までの散布が効果的です。）